View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kyushu University of Health and Welfare Repository

スポーツマンガに描かれたジェンダー文化
――女子バレーボールを題材に――

藤田由美子

A Study of Gender Culture in Japanese Sports Comics: A Content Analysis of Volleyball Comics

Yumiko FUJITA

Abstract

The purpose of this article is to examine the aspects of gender culture as portrayed in Japanese volleyball comics through content analysis. The content analysis in this study was based on the idea of "social constructionalism," in which researchers read and interpret the texts subjectively, rather than analyze the texts objectively. For this analysis, six volleyball comics describing female players were chosen, three of which were popular. The content analysis was conducted with interpretive reading of each comic, interpreting the representation of the female players and their coaches from feminist's perspectives.

The findings were as follows: Firstly, most of the coaches were male, they were represented as tough, conducting rigorous training to their teams, so there was an asymmetrical relationships related to gender in the coach-player relationships. Secondly, especially in the girls' comics, some kinds of "romantic love" were represented, in which a female will finally find her sweetheart. Thirdly, however, some different patterns of coach-player relationship and male-female relationship were represented in the recent comics. These items are discussed in terms of the 'subversion' and maintenance of the gender order.

Key words：gender culture, volleyball comics, interpretive content analysis, asymmetrical relationship, 'subversion' and maintenance of gender order

キーワード：ジェンダー文化　バレーボールマンガ　解釈的内容分析　非対称的関係性　ジェンダー秩序の「攪乱」と維持

2011.11.24　受理

問題設定

本研究の目的は，スポーツマンガに描かれる世界の中のジェンダー秩序／体制を，バレーボールマンガの分析を通して構築主義的視点より明らかにすることにある。

松田（1993）は，スポーツマンガ通史の概観を通して「スポーツマンガの意味的構造」概念を措定することの意義は大きいと論じた。松田によれば，スポーツマンガの意味的構造は，「『表象』としてのスポーツ像と社会の経験的スポーツ意識の関係に焦点をあてたもの」（p.208）であり，スポーツ行為に関わる３項図式のうち，「スポーツ行為主体」「行為客体としてのスポーツ」を繋ぐ「スポーツ媒介者」への焦点化である。

この議論を踏まえると，スポーツマンガにおける意味

九州保健福祉大学　社会福祉学部　子ども保育福祉学科　〒882-8508　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Department of Child Welfare Services, School of Social Welfare, Kyushu University of Health and Welfare
1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka-shi, Miyazaki, 882-8508, Japan

構造は，スポーツ行為から切り離されたものではなく，読み手＝主体のスポーツ行為・経験を踏まえた解釈によって読み取られるものである。本研究の主題に即して述べると，スポーツマンガのジェンダー分析を通して，われわれの社会におけるスポーツ行為におけるジェンダー問題，あるいはあらゆる読み手の生活世界に存在するジェンダー問題が浮かび上がるのではないだろうか。

筆者は，野球マンガの女性監督の描写におけるジェンダー表象を，構築主義の立場で，読み手の主観を考慮に入れて分析を行った（藤田　2011）。その結果，「男の世界」における「他者」である女性指導者は競技や指導力の卓越によって参入を許される一方，なお「女性身体」に対するまなざしを通して他者でありつづけること，を明らかにした。

本稿では，男女共通の競技であり，東京オリンピック（1964年）以降花形競技となったバレーボールを描いたマンガに注目する。それは，バレーボールがわれわれの社会においてより普遍的な競技であることによる。第一に，バレーボールは，中学校体育において教材として扱われており，小学校でも，2008年改訂『小学校学習指導要領』で第３学年以上にソフトバレーボールが導入されている。このため，ほとんどの人が何らかの形でこの競技を経験している。第二に，バレーボールは，野球，サッカーと並びメディア露出の多い競技のひとつである。男女ともバレーボールのプロチームが存在し，東京オリンピック以降定期的に行われる国際大会は，マス・メディアによって大きくとりあげられている。

本稿では，上記の背景を踏まえ，制作年代が異なるいくつかのバレーボールマンガ作品を選定し，分析を行う。ここでは，各作品にあらわれたジェンダー表象について，解釈的な内容分析を行い，それらの社会的意味について考察を行う。

スポーツマンガとジェンダーの背景

ここで，女子向けスポーツマンガの誕生と展開を整理しておきたい。まず，背景としての「少女文化」と「女子体育」について概観し，それを踏まえ女子向けスポーツマンガの意味について検討する。

１．「少女文化」とマンガ

戦前の少年少女雑誌は，中等教育の生徒を主たる読書層としていた。少女向け雑誌は，「女学生」，すなわち高等女学校の生徒を対象としていた。

今田は，少年少女雑誌の分析を通して，はじめはすべての子どもが立身出世する「少年」であったが，19世紀末から20世紀初頭にかけて，中等教育における男女別学の完成と時期をほぼ同じくして，「少年」カテゴリーから分かれた新たなカテゴリーとして「少女」カテゴリーが顕在化したことを明らかにしている。この「少女」は，「少年」とは異なる期待を受けてきたが，昭和初期の軍国主義化を背景に「少国民」に取り込まれていった（今田　2007）。「少女」と「少年」は，対として「二分法的」で「非対称」なジェンダー・アイデンティティをそれぞれ身につけていくことが期待された。

中間層を対象とした戦前の少年少女雑誌に対し，マンガ（コミック）は，大衆メディアとして位置づけられる。片桐（1990）は，大衆はメディアの受け手であるという伝統的見解を，大衆も送り手になり得るとして批判したのち，マンガを，「絵画から小説に至る表現形式の階梯に位置づけられる一大衆文化」（p.24）と位置づける。

戦後，大衆向けのストーリー漫画が普及したことで，マンガは広く読まれるメディアとなった。1950年代後半から60年代にかけて，コミック誌が数多く創刊された。少女コミック誌は，少年コミック誌よりやや遅れて創刊された。少女コミック誌の『少女フレンド』および『マーガレット』の創刊は，1963年であった（清水 1991）。マンガ雑誌の創刊時期をみても，マンガ（コミック）というメディアが戦後の経済成長にともない大衆メディアとして普及していったことがうかがえる。

２．学校教育における「女子と身体」

戦前の学校教育において，男子と女子は別々に教育されるべき存在となった。中等教育段階においては，男子は中学校，女子は高等女学校と，それぞれ異なる教育機関で教育を受けた。カリキュラムについても，中学校では外国語・理数・政治に時間を多く割り当てていたのに対し，高等女学校では裁縫など家事に関する教科目が必修であり，家庭性が強調されていた。

ジェンダーの分割線が明瞭にされていた教育内容のひとつが，体育であった（高橋ほか　2005）。1886年の学校令において男子に兵式体操と普通体操，女子に遊戯と普通体操を課すとされた（同上書，p.22：萩原論文）。

1903年の「高等女学校教授要目」においては，「医学的合理主義に基づく運動の効用と富国強兵に基づく母体の国家管理」を理論的背景に，女子体育が推進されるようになった（同上書，p.32：萩原論文）。また，19世紀にイギリスのブルーマーによって考案され，アメリカ経由で日本に体操服として紹介されたブルマーは，男女の境界線を越境する可能性を持つスポーツへの女性の参入

の象徴であると同時に，女性と男性の分割線をかえって明確にするものであった（同上書　pp.55-92：谷口論文）。

学校教育において女子体育の重要性が「母体」の観点から認識された後も，競技スポーツをする女性に対する好奇の視線は持続した。山下（2001）は，アムステルダムオリンピック（1928年）女子800メートル銀メダリスト人見絹枝をとりあげ，競技スポーツをする女性がたえず好奇の視線にさらされ，特別な存在として構築されてきたことを，言説分析によって明らかにした。

3．スポーツと少女マンガ・コミック

マンガ・コミックの一ジャンルを占めるスポーツものは，野球をはじめ，それぞれの時代におけるメジャーなスポーツをとりあげた。野球マンガは，1950年代後半，プロ野球のテレビ中継の開始と「長嶋人気」により爆発的にブームとなった（米沢　2002）。1980年代後半以降，サッカー，バスケットボールといった競技は，それを取り扱ったコミックの人気と相まって，子どもたちに人気の競技となった。

少女マンガ・コミックにおけるスポーツものの興隆もまた，現実世界におけるスポーツの普及と関連している。東京オリンピックで日本女子バレーボールチームが金メダルを獲得して以来，全国的にバレーボールブームが起こった。ほどなく，少女向けコミック誌においてもバレーボールを題材とした作品が発表されるようになる。1968年発表の『サインはＶ!』『アタックNo.１』を皮切りに，バレーボールマンガ・コミックが数多く発表されている。

内容分析　――視点・対象・方法――

1．視点

以上の背景を踏まえ，女子バレーボールを題材に，マンガというメディアにおけるスポーツとジェンダーの問題を考察するための手がかりを得るため，内容分析を行う。内容分析では，伝統的な内容分析の手法である登場人物のジェンダー比やジェンダー役割の分析によらず，コートにおける男女の表象を析出することを試みる。

バレーボールは男女共通の競技であり，それを扱ったマンガ作品は，少年向け・少女向け雑誌の双方にある。したがって，網羅的に分析しようとすれば，a.競技者の性別：「男子バレーボール」－「女子バレーボール」，b.主たる読者層の性別：「少年マンガ」－「少女マンガ」，c.作り手の性別：「男性作者」－「女性作者」，といった比較分析が可能であろう。

表　作品一覧

タイトル	サインはV!	アタックNo.1
作者	神保史郎（作），望月あきら（画）	浦野千賀子
出版社	講談社	集英社
シリーズ	講談社漫画文庫	ホーム社漫画文庫
初巻年	1976（1968）	2003(1968)
終巻年	1977（1970）	2003(1970)
巻数	8	7
舞台	実業団	高校
備考	8巻途中～オリジナル別巻	
タイトル	真コール！	BAN BON!
作者	藤田和子	佐々木潤子
出版社	小学館	集英社
シリーズ	フラワーコミックス	マーガレットコミックス
初巻年	1991	1992
終巻年	1992	1994
巻数	9	9
舞台	クラブチーム（主人公は高校生）	中学校・高校・全日本
備考		1-4巻は水月菜里子，5-7巻は和久井勇
タイトル	ヨリが跳ぶ	少女ファイト
作者	ヒラマツ・ミノル	日本橋ヨヲコ
出版社	講談社	講談社
シリーズ	モーニングKC	イブニングKC
初巻年	1995	2006
終巻年	1999	2010（連載中）
巻数	20	7
舞台	実業団	高校
備考		

本稿では，作品数の少なさから，厳密に比較分析を行うことを避ける。しかし，考察にあたっては上記の区分があることを踏まえる必要があるだろう。

また，本稿では，作品の発表年代を，全日本バレーボールチームをめぐる状況にしたがって，暫定的に次の三つの時期に区分した。すなわち，①東京オリンピックを契機とするバレーボールブームを反映した1960年代後半から1970年代，②他国の台頭がみられた1980年代から1990年代，③マス・メディアによるバレーボールブーム以降の2000年代，である。

2．対象および方法

本研究では，バレーボールを扱った作品のうち，女子バレーボールに限定し，①テレビアニメなどで筆者にとって印象に残った作品，②マンガ評論などでとりあげられている作品，③ネット上で言及されている作品，に注

目して，作品を選定した。

本稿では，表に示した６作品について分析考察を行う。各作品について，第一に，主要登場人物のバレーボール歴およびジェンダー関係の分析を行う。第二に，物語展開や登場人物のはたらきにおけるジェンダー秩序の読み取りを試みる。

バレーボールマンガの中のジェンダー文化

１．主要登場人物の分析

（１）競技生活の経緯

『サインはV!』の中学生朝丘ユミは，実業団でバレーをしていた姉がコーチの「しごき」中に倒れて死んだため，バレーボールを憎んでいた。しかし，選手不足で仕方なく参加した大会で活躍し，スカウトに来ていた立木武蔵・牧圭介の目にとまる。バレーが憎いという気持ちをボールにぶつけるのだ，と諭され，立木武蔵に入る。

『少女ファイト』で，７歳年上の姉・真理の影響で，嫌々ながらもバレーボールを始めた大石練は，天才選手であった姉の不慮の死後，チームで「狂犬」と呼ばれるほどの有名選手となったが，チームメイトの裏切りにあい自信を失った。中学卒業前，姉のチームメイトであった黒曜谷高校女子バレー部監督・陣内笛子に「姉貴が最後に試合で見た景色をお前も見たくはないのか？」と諭され，黒曜谷女子バレー部で頑張る決意をする。

『アタックNo.１』の鮎原こずえは，転地療養のために転校した富士見学園中学で，不良チームをかばいバレー部とバレーボール対決したことをきっかけに，バレーボールに目覚め，富士見学園高校に進学後も厳しい指導者と対峙しながら成長していく。そして最後には日本代表選手となる。

『真コール！』の藤咲真は帰国子女，白鳳学園高校１年生で，幼なじみで初恋の人・渡辺隼人にスポーツ写真撮影の練習台になってほしいと頼まれバレーボールを始める。持ち前の身体能力と吸収力で急速に力をつけ，新設のクラブチームJVCに入部し，レベルの高い選手たちに気後れしつつも成長する。

『BAN BON!』の水月菜里子は，強豪の北中バレー部では「下手」で男子部のマネージャーを務めたが，転校先の神谷中でバレー部員にポジションを尋ねられ，口から出任せで「セッター」と答えてしまう。はじめは下手であったが，北中男子バレー部員でのちに恋人となる藤堂の励ましで成長する。やがて，やさしいトスを上げることができる水月の評価は日増しに高まり，全国大会に出場するまでになる[(1)]。

『ヨリが跳ぶ』の大久保ヨリは，沼里女子高バレー部で，自信過剰でスパイクを打ちたいばかりで，チームでは浮いていた。強豪国舞化粧品の入団テストで選手ではなく「打ち屋」としての契約を言い渡され落ち込むが，バレー部顧問・武田の紹介でオグリ製菓に入社する。監督・高崎に乗せられ，また国舞のエース・梶容子（愛称ヒロコ）とのかかわりを通して，力をつけていく。

『少女ファイト』の小田切学は，小学校時代，太っていることでいじめにあっていたところを助けてくれたクラスメートの大石を恩人と思っている。中学校卒業間際に再会した大石の自信のなさに驚きつつも，憧れの大石をモデルに趣味のマンガ作品を描きたい気持ちから，同じ黒曜谷高校のスポーツ科学科に入学する。マネージャーとなるつもりが選手として入部させられるが，名門進学高校への進学を勧められたほどの頭の良さと素直さで，プレイヤーとして急成長する。

（２）「成長」物語

主要登場人物の競技開始の経緯および経過は，おおむね，(1)バレーボールと距離を置いていた主人公のバレーボールへの目覚め（先の３名）と，(2)初心者または「普通」「劣っている」と評価された選手の成長（後の４名），に分類される。各登場人物に共通しているのは，スポーツを媒介にした「成長」の物語が描かれていることである。それは，何らかの挫折を経験しそれを乗り越えることにより成長することへの称揚が，各作品の底流にあることを示している。

２．師弟関係

女子バレーボールのマンガにおいて，主要登場人物の指導者は男性が多い。

時期①の作品において，師弟関係は，強い指導力を持った指導者（コーチ，のちに監督）に選手がついていく構図である。指導者は，時として体罰も伴うほどの強い指導を行う。一方，選手たちは，指導者を信じ，彼または彼女の厳しい指導にも耐える。

たとえば，『サインはV!』では，主人公の朝丘は，自分をバレーボールに導いてくれた監督・牧を信じ，ついて行く。自分の姉が死んだ時に「しごき」を行っていた指導者が牧であったことを知って動揺するが，牧の愛情ある指導を思い出し，彼が姉を殺したのではないと確信し，チームから去ろうとする牧を引き留める。

ほぼ同じ時期に発表された『アタックNo.１』では，鮎原は，富士見学園中学校から高等学校でのバレー部で，指導者の厳しい練習に耐え，小柄ながらアタックの名手になる。本郷をはじめ，数名登場する指導者のほとんど

が男性である（図１）。途中，バレー部顧問の国語教師・清水晴子が指導者となる（図２）。彼女は，大学でバレー経験があり，かつ「校長の娘」である。なお，彼女は，高校時代の先輩で父親が指導者として連れて来た岩島が郷里の四国へ帰るのを追いかけ，結ばれる[(2)]。

時期②の作品にも，強い指導力を持つ男性指導者と女子選手という構図は維持されている。ただし，この時期に発表された二作品には，女子選手を育てるための指導者による奇抜なアイデアがみられる。『真コール！』では，バレーボールを始めて日が浅い藤咲真の成長のために，クラブチームJVCの指導者・万紀は特別なメニューを組む。また，『BAN BON!』の第二部では，和久井勇（ゆう）は，男子校の中学校に「男」として入学し，監督のはるきに「男子選手」として鍛えられる。全国大会決勝で「女」であることが知られた後行方不明になった勇は，２年後には二重国籍であることを生かしてブラジルのユース代表になっていた。その後，中学校時代の恩師・はるきが日本代表監督となり，勇を代表選手に入れる。それは，現役時代にははるきとコンビを組んだ勇の兄・竜一による，妹を日本代表選手にするための壮大な計画であったと，作品の終末部分において明らかにされる。

ところが，『ヨリが跳ぶ』において，指導者は「見守る」存在として描かれている。主人公の大久保は，高校のバレー部顧問が手を焼くほどに試合に夢中になってしまうとチームプレーができなくなる選手だった。顧問は大学の後輩でありオグリ製菓の監督・高崎にヨリを紹介する。高崎は，ただ体が大きく食べることが好きなヨリに驚く。しかし，高崎は，次第に，大久保の「器」に気づき，彼女の成長を見守る。さらに高崎は，時折，大久保やチームを鼓舞するひとことを発する。このように，彼は，厳しい指導によらず，チームの主体的成長を促している。

唯一の時期③の作品である『少女ファイト』に登場する女性指導者，黒曜谷高校女子バレー部監督・陣内笛子の描写は特異である（図３）。彼女は，喪服として黒紋付を着用し，杖をついて歩いている。

陣内は，選手に「文武両道」を求め，テスト成績が「赤点」であればレギュラーになれない，という厳しい条件を課す。その一方，彼女は，選手を遠くで見守る。また彼女は学校以外でも喪服を着用し，かつての恋人（大石が中学時代に在籍した強豪校の監督）と距離を置く。

陣内の服装や態度の背景には，彼女の高校時代の辛い思い出がある。彼女は黒曜谷の卒業生であり，春高優勝メンバーであったが，脚の故障により，選手生命を絶たれた。春高決勝前日にチームメイトであった大石の姉・真理が目の前で交通事故に遭い死亡したことについて，横断歩道を無理して渡ろうとした真理を自分の脚が悪いため引き留められなかったため，と今なお悔やんでいる。

３．恋愛

とりわけ少女マンガにおいて，「恋愛」は重要なモチーフとなっている。

『アタックNO.１』の鮎原は，遠い親戚で初恋の人・一ノ瀬努の励ましを受けながらバレーに打ち込む。バレーに集中してもらいたいがために冷たく当たる努に不安を感じることもある。努が電車にはねられ死亡し，深い喪失感を感じた鮎原は，努の母親がくれた彼の日記を読んで自分への思いを知る。その後，鮎原は，努の双子の兄・竜二にその面影を見ようとするが，努への特別な思いに気づき，心の中に生き続ける努を大切にしようと思う。

『BAN BON!』第一部では，中学校の強豪バレー部のマネージャーをしていた主人公・水月が転校先の中学校で選手となり，セッターとして成長する。水月の成長の陰には，常に恋人の同級生・東間の励ましがある。

『真コール！』では，主人公・藤咲が初恋の人・渡辺のことばをきっかけに初体験のバレーボールを始める。学校の部活動では才能をもてあましていた藤咲は，誘われてクラブチームに入る。その後も藤咲は，次々訪れる試練も彼の助言によって乗り越える。そして，ついに若き日本代表選手になる。

青年誌に連載中の『少女ファイト』においても，恋愛は，物語の重要な伏線となっている。この作品において恋愛の作用は非常に複雑である。ここでは，主要登場人物の大石を中心とする関係性に注目して考察する。

大石練の幼なじみ，式島滋と未散（みちる）の１歳違いの兄弟は，大石に恋心を抱いている。小学６年の時，大石と同級生である弟・未散が思わず居眠り中の大石にキスしようとしたところを大石の親友である同級生の唯隆子に盗撮され，それが同級生にばらまかれたために大石はチームメイトから仲間はずれにされ，一緒に行くはずだった強豪校への推薦入試面接にひとりで行く羽目になった。このことは大石にとっては姉の死に続く大きな挫折であり，彼女は人間不信になり，自分の能力に対する自信を失った。未散も写真をネタに隆子に交際を迫られ，その後性関係を持ってしまったことで，ふつうの恋愛ができないという不安に苛まれるようになる。未散は，隆子との関係を解消するために，中学校時代のクラスメートでもある同級生の小田切学に「（形だけでも）つきあう」ことを提案し，小田切は事情を承知の上でそれを

（『アタックNo.1』第1巻，pp.156-157）

図１　厳しい指導を行う男性指導者

（『アタックNo.1』第4巻，pp.146-147）

図２　新しい女性指導者

（『少女ファイト』第2巻，pp.74-75）

図３　喪服の女性指導者

受け入れる。

滋は，大石に対する思いを，直接的ではないが打ち明けることで，チームメイト公認の仲となる。しかし，滋は，彼自身が父親と同様に，遺伝性の目の疾患によりやがては失明するであろうことを大石に告白する決意ができないでいる。

大石をめぐる人間関係の複雑さには，恋愛をめぐる感情のもつれが背景にある。そこに描かれる恋愛のうち，未散と隆子の交際，小田切と未散の偽装恋愛については，必ずしもロマンティックではない。

考察

１．マンガにみられる描写の意味

（１）指導者－選手関係にみるジェンダー秩序

バレーボールマンガにおいては，「男性指導者」対「女子選手」という関係性が顕著に描かれていた。しかし，学校の部活動を舞台にした作品に限ってではあるが，女性指導者の存在がわずかながらも描かれている。ここでは，分析結果について，以前考察対象とした（藤田 2011）野球マンガの女性指導者との比較で考察する。

前稿で論じたように，野球マンガにおいて，女性指導者は「他者」であった。それは，この競技が長らく「男子の競技」として発展した歴史を有し，今なお女子の参入自体が少ない状況にあることを反映しているためではないかと考えられる。

一方，バレーボールは，男女共通の競技として広く認識されている。本研究での分析作品に登場する女性指導者は，大学バレー部で活躍した者や春高バレーの優勝メンバーとして描かれており，顕著な競技歴を有している。それにもかかわらず，本稿で分析対象としたマンガ作品においては，女性指導者の描写が少ない。その背景は，野球マンガに登場する女性指導者の少なさとは，若干異なっているように思われる。

本研究で分析した作品における女性指導者の少なさは，バレーボールの実業団の指導者の構成とパラレルではないかと考えられる。現在，Ｖリーグの女子チームの監督のほとんどが男性である[3]。したがって，単に競技人口が多い・少ないだけでは，指導者の性別構成を説明できない。たとえば，「女性指導者は向かない」といった，女性指導者の輩出を抑制する言説の存在可能性も含めて，スポーツ指導者とジェンダーの問題にアプローチ

することが必要だろう[4]。

（2）「異性愛」的な「対」の持続

女子選手と男子生徒，女子選手と男子指導者，という異性愛的な対構造について検討する。第一に，時期①の作品においては，強力な男性指導者の指導を女子選手が信じ，ついていき，選手として成長を遂げる，という描写がみられる。厳しい指導に関する描写がほとんど見られなくなる1990年代以降の作品においても，女子選手の成長・挫折において男性指導者や男子の選手仲間などの果たす役割の描写は顕著である。

第二に，多くの作品において，「恋愛」は重要なモチーフのひとつである。コートの中では厳しい勝負に挑む女子選手たちについて，恋人または憧れの人＝男性指導者または男子生徒からのあたたかい励ましを受ける，互いにライバルとして切磋琢磨するうちに恋愛感情が芽生える，といった描写がみられる。恋が成就するにせよ悲恋に終わるにせよ，恋愛に関するエピソードは読者にとって強い印象を残すものとなりうる。

「異性愛」的な「対」は，女子選手同士のたたかいによって，より強調される。恋愛が女子選手の亀裂の原因となる『少女ファイト』の場合も，恋愛がバレー部内のライバル関係とあまり関連しない他の作品（『アタックNo.１』や『真コール！』）においても，「女のたたかい」を強調することにより恋愛がより浮き立つ描写となる[5]。

（3）関係性の揺らぎ

1990年代後半以降の２つの作品，『ヨリが跳ぶ』や『少女ファイト』からは，関係性の揺らぎも浮かび上がる。ここでは次の２点を指摘しておきたい。

第一に，「指導者」－「選手」間の，権威主義にもとづく関係性の揺らぎがみられる。他の4作品には，男性指導者による強力な指導がみられた。しかし，これら２作品の指導者は，選手やチーム自身の主体的な成長を「見守る」存在として描かれている。特に，『少女ファイト』の陣内笛子は，自身が厳しい練習で膝を負傷したために友を救えなかったという負い目から，「文武両道」を厳しく課す以外，自らは特訓など厳しい練習を課さない。

第二に，恋愛関係において，調和的な対関係が必ずしも描かれていない。とりわけ『少女ファイト』は，小田切と未散の偽装恋愛など，恋愛を必ずしもロマンティックなものとして描いていない点で，他の作品と大きく異なる。また，『ヨリが跳ぶ』において，少なくとも主人公のヨリにとって，恋愛は自分の問題とはならない[6]。

２．メディアとスポーツにおけるジェンダー問題

本稿の締めくくりに，内容分析で得られたバレーボールマンガにおけるジェンダー文化について，現実の私たちの生活世界におけるスポーツとメディアとのかかわりで考察する。

マンガ・コミックにおける女子スポーツ選手の描写は，それ自体が，「スポーツする主体としての女性」の顕在化のあらわれである。その背景には，女子バレーボールチームの金メダルなど，国際競技大会での活躍により，「スポーツをする女子」が一定の市民権を得たことが挙げられよう。

一方，コミック作品に登場する女性指導者の少なさは，スポーツ界における現実の指導者の少なさの反映だけとは言い切れないだろう。女性指導者の少なさの背景には，スポーツにおける，「男性」を優位とする非対称なカテゴリーとしての「女性」と「男性」の分割が考えられる。

スポーツにおける「男性優位性」の言説は，皮肉にも，それを限定的ではあるが打ち破る競技者が登場するたび，強固に維持され，再生産されてきた。ある時は，その女性の「特殊性」を引き合いに出すことによって，ある時はその女性には有能な男性指導者がいることを強調することによって，ある時は，女性は「娘」であり「妻」であり「母」となる，という言説を持ち出すことによって，「男性優位」言説は維持・再生産される（飯田 2003，高橋ほか　2005，山下　2001）。

「二元論的」かつ男性優位的なジェンダー体制は，スポーツ界に限らず，あらゆる生活場面において，あらゆる言説実践において，つねに遍在する。その基盤は，「女性」／「男性」という二つのカテゴリー（しかないこと）が，「生物学的に」「本質的」なものとして自明視されていることである。ポストモダン・フェミニズムは，古典的なフェミニズムが「一元的自我」「二元論的ジェンダー」を前提としたことにより男性優位のシステムに取り込まれたことを指摘している（藤田　2009）。

前項で指摘した，非対称なジェンダー関係の「揺らぎ」は，いかなる意味を持つのか。そして，その帰結は，いかなるものとなりうるか。すなわち，「ジェンダーの二分法（gender dichotomy）」を攪乱するものなのか，あるいはかえってそれを強固に維持するものなのか。このことについては，たとえばその作品の読み手の解釈を分析するなどの方法によって，検討する必要があるだろう。

謝辞

本研究は，平成21年度～平成23年度科学研究費　基盤研究（C）『メディアに描かれたスポーツにおけるジェンダー・セクシュアリティおよびその解釈』（課題番

号21510298）研究成果の一部である。本研究の遂行にあたり，京都国際マンガミュージアム，現代マンガ図書館　内記コレクション，　広島市まんが図書館，米沢嘉博記念図書館（50音順）で資料閲覧を行った。関係者の皆様には，心より御礼申し上げる次第である。

注

(1) その後水月は藤堂と並び，日本代表選手になった。

(2) なお，作中，女性指導者に対する否定的なコメントが男性指導者によって陳述されている。鮎原がキャプテンとして厳しい練習を課したことに部員が反発する場面を見た時，コーチの本郷は，「女子のバレーは女のコーチではつとまらないときいていたが　こうまではっきりあらわれるとは思わなかった・・・」と言う。ただしその発言は，鮎原に回転レシーブを身につけさせるために，一時的に彼女をチームから離すための，本郷の計略によるものであった（文庫版第2巻，p.218）。

(3) Ｖリーグ公式サイトによると，女子加盟チーム21チーム（内訳：プレミアリーグ女子８チーム，チャレンジリーグ女子12チーム，サマーリーグ女子１チーム（16チームだがうち15チームはプレミアリーグまたはチャレンジリーグに加盟）のうち，女性監督はわずか２チームである（一般社団法人日本バレーボールリーグ機構　2011）。

(4) この背景には指導者輩出のシステムの存在も考えられるが，本論では紙幅の関係で割愛する。

(5) ただし，『ヨリが跳ぶ』では，女の恋愛は，少なくとも主人公の大久保ヨリについてはほとんど描写されていない。キャプテンの新入男性社員への恋心も，ヨリの傍若無人な振る舞いによって作品中の笑いの要素となってしまう。

(6) ただし，ライバルチームの選手を慕うあまり彼女につきまとう男性の真剣な思いを知り，試合中に重傷を負った選手に男性との関係を取り持つ場面はみられた（第14巻）。

引用・参考文献

Aitchison, Cara Carmichael 2007, *Sport & Gender Identities: Masculinities, Feminities and Sexualities,* Routledge.

Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity,* Routledge　(＝1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル　―フェミニズムとアイデンティティの攪乱―』青土社）.

Connell, R. W., 1987, *Gender and Power,* Polity Press（＝1993，森重雄，菊地栄治，加藤隆雄，越智康詞訳『ジェンダーと権力　―セクシュアリティの社会学―』三交社）.

藤田由美子　2009,『幼稚園・保育園における子どものジェンダー構築に関する教育社会学的研究』広島大学　博士論文。

藤田由美子　2011,「スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察　―野球マンガにおける女性監督の分析より―」『九州保健福祉大学研究紀要』12, pp.69-78。

飯田貴子　2003,「新聞報道における女性競技者のジェンダー化　―菅原敦子から楢崎敦子へ―」『スポーツとジェンダー研究』1，pp.4-14。

飯田貴子　2005,「オーディエンスの多声性とジェンダー対抗的自己形成　―女性競技者の新聞報道分析―」『スポーツとジェンダー研究』3，pp.26-41。

今田絵里香　2007,『「少女」の文化史』勁草書房。

一般社団法人日本バレーボールリーグ機構　2011,「バレーボール　Ｖリーグ　オフィシャルサイト」(http://www.vleague.or.jp/，2011年11月17日閲覧)。

岩間夏樹　2010,「イマドキの若者考/　スポーツマンガの現在（最終回)」『労働基準広報』1667（2010年1月21日号)，pp.38-41。

片桐新自　1990,「マンガの社会学　―マンガを通してみる大衆意識の分析―」『桃山学院大学社会学論集』24(1)，pp.21-53。

松田恵示　1993,「スポーツとマンガ　―生活世界におけるスポーツへの解釈的アプローチ―」『大手前女子大学論集』27，pp.197-219。

重松一義　1996,『漫画考現学　―そこに知る子ども世界の理解と批評―』近代文藝社。

清水勲　1991,『漫画の歴史』岩波新書。

高橋一郎，萩原美代子，谷口雅子，掛水通子，角田聡美　2005,『ブルマーの社会史　―女子体育へのまなざし―』青弓社。

高橋すみれ　2009,「悪女の『役割』　―少女マンガ『ライフ』にみる少女の『女ことば』―」『Gender and Sexuality: Journal of Center for Gender Studies, ICU（国際基督教大学)』4，pp.17-37。

谷口雅子　2007,『スポーツする身体とジェンダー』青弓社。

谷本奈穂　1997,「マンガ世界を通してみるユースカルチャー　―内容分析の読者志向的解釈―」『大阪大学教育学年報』2, pp.61-75。

山田浩之　2002,「スポーツ指導者としての教師　―マンガにみる現代の教師像―」『松山大学論集』14(2), pp.83-102。

山下大厚　2001,「ジェンダー／セックス／身体-アイデンティティの不連続と攪乱　―アスリート人見絹枝における闘争的身体と存在証明をめぐって―」『法政大学大学院紀要』47, pp.127-137。

米沢嘉博　2002,『戦後野球マンガ史　―手塚治虫のいない風景―』平凡社新書。